

一本の鉛筆を交換

◇ 老紳士の友情物語 ◇

高田福松

私たち日本ボーイ・スカウト派
の同勢約百五十人は、第十一回世界大会のギリシャ国、マラソンの浜でのキャントン後、バスで七ヶ国を旅行し、最後の五日間イギリス各地を参観してある。

青少年は百二十人余で、ロンドン郊外六十ヶ所立と思うが、

シティ・高麗を見学し、さらにイトン・スクールの側を通り、ボイ・スカウトの世界的指導者研修所であるギルヴィルの森に向かって。

グッドターン(日本の書行)の象徴ともいわれるアメリカ・ボイ・スカウト連隊から贈られた野牛の像を立たししながら田場門近くにきたとき、ひとりの老紳士が立っていた。聞くと「この日本派遣団員の中」某といふ少年がきているはずだ。その少年にせび寄せてほしく」とのこと。老紳士にその少年を合わせたところ「数十年前君のおとうさんと私はロンドン大会の折にキャ

ブ場でいらっしゃったんだ。

君のおとうさんは私の鉛筆を

筆交換したんだよ。君のおとう

さんの手元に入っているんだ。

その息子さんがくるところのバス

コットランドから寄りにきたの

少年は駄菓子などのためか、その存

在は分らなかつたらしい。

「隊長

おとうさんには私の手

鉛筆をもらつておいたんだ。

もつてゐるかな」と尋ねられたが

少年は駄菓子などのためか、その存

在は分らなかつたらしい。

「隊長

おとうさんには私の手

鉛筆をもらつておいたんだ。

万葉史跡めぐり

歌物語の風情も残る

山背路

(城)を経て近江に通

する道は、万葉時代の

主要道路の一つであ

った。大体今日の国道二

四号線・国鉄奈良線沿いで、宇

治市木幡のあたりから石田・

醍醐・塗坂山と近江に向かって

いたらしい。

万葉歌も万葉な。その沿道の

作品をみていて、当時の山背

路の風景の状況を語つてい

る。その地名を列記してみると

皋の里(木津町・加茂町・山城

町)・岸川(木津川)・柏原(

(相楽郡の山)・可爾波(山城

町緒田)・多奈良の野(田辺

町)・つつきの原(田辺町)・

くひ山(田辺町飯坂)・高(井

の母が見るとわが持てる

かひ)・衣が縫れる」石をふ

高田勇

奈良山を越

えると、旅人

達はすぐに泉

川を渡らねば

ならない。

次のが秀歌はここに生まれた。

つきねふ山城道を他天

歩(かむ)

「他天(おのづま)歩(かむ)

しまよけは見(み)る

よしのし(よしのし)

思(おも)ひ心(こころ)

心(こころ)痛(いた)

しきれぬが(あ)

「涙(なみだ)が(あ)

涙(なみだ)が(あ)

涙(なみだ)が(